同値関係と価値形態論

永　田　聖　二

Equivalence Relation and Form of Value

Seiji NAGATA

1. はじめに

「貨幣は財を購入するが、財は貨幣を購入しない。そのため、貨幣的作用の運行を研究するための本来の場は、直接、財市場である。これが本書の中心テーマである。」[1)]

このような宣言をかかげて、購買という行為にかんする貨幣と商品との非対称性に読者の注意を喚起したにもかかわらず、パティンキンは、それにつづく議論のなかでは、このような試行をうまく処理することができず、せっかくの野心的な企ても、せいぜい、商品需要が、相対価格だけではなく、保有する金融資産の実質価額にも依存するという、いわゆる「実質残高効果」を紹介するだけに終わった。かれの採用した経済モデルが、ワルラスに起源を発する交換の一般均衡モデルである以上、このモデルがオリジナルなタイプのままでは、経済変数の実質値は、すべて、各人に与えられた商品の初期賦存量と、各種商品へのめいめいの主観的な評価づけだけの情報から決定されてしまい、その結果、貨幣に残された課題は、たかだか、絶対的な物価水準を決定するだけという「貨幣ヴェール観」が導かれ、実物界と貨幣界とに境界を定める「古典派二分法」の世界に陥ってしまう[2)]。そこで、その打開策として、いわば苦しまぎれに、需要関数のなかに保有金融資産の実質価

1）パティンキン[32]訳書xxiページ。なお、すべての経済システムに共通な非歴史的な概念である「財」という用語を、商品経済に特有なそれ「商品」に代えて使用しているという点では、パティンキンは、いわゆる「近代経済学」に共通な誤りを犯しているが、それに輪をかけて、そこでは、かれは、なんらかの使用価値をもつものを「商品」とする一方で、この「商品」に貨幣を含めた全体の和集合を「財」とよぶ混乱まで披露している。たとえば、訳書34ページ参照。もっとも、この引用文で意味する「財」には、あきらかに、貨幣は含まれないので、用語上の首尾一貫性まで欠如しているのではあるが。

2）根岸[27]を引用すれば、

「ワルラスはいよいよ最後に貨幣を導入します。ところが、貨幣がなくてもうまくいっている経済に貨幣を持ち込もうというわけですから、せっかく貨幣が最後に真打ちよろしく登場しても、もはやなすべき仕事はほとんど残っていないという非常に皮肉な結果になります。…貨幣の役割は物価を決めるということだけです。…最後に出てくる真打ちにしてはいささか役不足ということに、ワルラスの世界の貨幣はなってしまいます。」(261-262ページ)

額というあらたな変数を導入して、強引に、実物界と貨幣界とのリンクを設け、安直に、両体系の同時決定方程式として問題を矮小化してしまったのがパティンキン・モデルであると解釈することもできるだろう。

また、さきの引用文では、貨幣で商品を買うことはできても、逆に、商品で貨幣を買うことはできないという意味で、パティンキンは、事実上、ほかのどんな商品にも代役をつとめることができない、一般的等価物としての貨幣の独占的な地位を認めているのではあるが、このことから、なぜ、貨幣の作用を分析する場が商品市場になるのかについては、明確な根拠を提示してはいない。「商品」、「財」、そして貨幣をめぐる、かれが使用する用語上の混乱をみれば、あきらかに、商品と貨幣とは、議論の前提として、「マナのように」はじめから天下り的に与えられ、その存在が保証されているので、商品のなかから特定の商品が出現し、それが一般的等価物としての独占的地位を占めるようになってはじめて貨幣が登場するという価値形態論に類した考えは毛頭もないはずである。ともあれ、文言どおり解釈すれば、貨幣は商品を買えるので、貨幣の効果は、この購買という行為を通じて、直接、商品市場にあらわれる、これにたいして、一般に、商品で貨幣は買えないのだから、商品から貨幣への反作用は考慮しなくてもよい、とでもいうのであろうか？　それとも、一般均衡理論が信奉する、「消費者」の予算制約式の総計として導かれる恒等式がもたらす「ワルラスの法則」を認めれば、「財」と貨幣を含めたすべての市場のなかで、1つだけは従属になり、のこりの市場さえ均衡すれば、自動的に、この市場の均衡条件はみたされるので、「財」市場の均衡さえ注目すれば、貨幣市場の様相も、その鏡像として余すところなくとらえることができる、と考えるのか？　もっとも、後者のばあい、そもそも、「ワルラスの法則」自体からは、除去される市場には、どんな優先順位もつけることができないので、貨幣の均衡条件を消去する積極的な理由づけには、いささか説得力に欠けるようにもおもえるのではあるが。いずれにしても、パティンキンのこの断言は、物々交換からの議論の延長線上に、天下り的に、いきなり、貨幣が自明な存在として与えられた、特殊な土壌から醸成されたものであると、結論できるだろう。

なお、ポスト・ケインジアンの立場から、パティンキンが依拠する一般均衡理論の現実妥当性には懐疑の念を示し、ワルラス・モデルを評して、配給された便宜品を各自の嗜好に応じて相互に交換しあう「捕虜収容所」の世界であると揶揄する、ジョーン・ロビンソンであっても、その批判の論拠といえば、そこには、「現在と将来とを結びつける」価値保蔵手段としての貨幣が欠けているという、ケインズ直伝の流動性選好説の立場からの批判がみられるにすぎない[3)]。その点で、不意の支払いに備える必要性、または、販売代金の授受に応じて期首から期末へ向けて変動する貨幣残高のいわば在庫管理の問題、あるいは、ほかの代替的な資産と比較した利子生み資本としてのポートフォリオ選択問題として、貨幣保有の動機を根拠づけようとする、パティンキンや、かれ以後、一般均衡理論の流れ

3）ロビンソン[33]訳書27ページ。なお、資本主義的生産という観点を欠いた純粋交換モデルの不毛性を、谷崎潤一郎の『小さな王国』という小説を題材に、指摘したものに、向坂[35]がある。また、生産を欠いたシステムが、マクロ的にみれば、正の利潤をともなう価格の根拠づけに失敗することについては、永田[23]参照。

を継ぐ新古典派貨幣理論の提唱者たちと、皮肉にも、軌を一にする側面さえうかがえる[4)]。かれらは、ともに価値保蔵手段としての貨幣の役割を強調し、いわば蓄蔵貨幣の側面から経済システムを照らし出そうとしているのであるが、そもそも、流通手段としての貨幣と支払い手段としての貨幣とを結びつけ、ひいては、利潤獲得の手段として資本に転化するための媒介項になるはずの蓄蔵貨幣の存在を、はじめから議論の前提に置けば、論理的にみればそれ以前に解決されるべき一般的等価物としての貨幣の役割を解明できるはずがないことは、あきらかであろう。とくに、一般均衡理論の世界では、商品所有者のあいだの交換過程そのものを議論の対象に設定しているために、貨幣という一般的等価物なしには、直接にせよ間接にせよ、交換が不可能であるとは思いもよらず、せいぜい、計算単位としての貨幣なしには価格表示の統一性に欠けるため取引が煩雑・不便である、あるいは、貨幣なしでは条件が折り合う交換相手を捜し出すための取引コストがかさむという程度の認識にとどまることになろう。このような交換過程論と一体化した価値形態論の問題については、『資本論』で展開される価値形態論と交換過程論とのかかわりあいの問題として、次節以後でもとりあげよう。

2.『資本論』における使用価値と交換価値

『資本論』の冒頭で、マルクスは、資本主義経済では、富は膨大な商品群として姿をあらわし、この富を形づくる個々の要素が商品であると道破して、人々のなんらかの欲望をみたす「財」という非歴史的で一般的な概念ではなく、分析の出発点には、この経済システムを特徴づけ、また、このシステムの基底にすわる商品を位置づけた。そして、商品には、その有用性を反映する使用価値と、他の商品と交換される比率としてあらわれる交換価値という2つの要因があるが、前者は後者の「素材的担い手」として、商品が交換価値をもつための消極的ないわば必要条件ではあるが、交換価値そのものを左右するのに十分な積極的要因にはならないと判断し、これ以降、交換価値の分析に進んでいく。なぜなら、このシステムでは、富は、直接、むき出しのまま素材的な姿であらわれるのではなく、あくまで交換価値をともなった一群の商品の姿を呈することになるからである。

こうして、マルクスは、交換価値の分析へと進むのであるが、議論の出発点で、かれは、$x_0(=1)$単位の商品0は、商品1のx_1量、商品2のx_2量、商品3のx_3量、…、商品iのx_i量、…など、さまざまな商品のそれぞれ異なった量と交換されることに注目する。ここでは、交換価値そのものは、

$$x_0=x_1,\ x_0=x_2,\ x_0=x_3,\ \cdots,\ x_0=x_i,\ \cdots$$

というふうに、さまざまなかたちで表現されてはいるが、表現する形式は違っても、これらは共通に、おなじx_0単位の商品0の交換価値をあらわしているはずである。そう判断したかれは、交換価値にかんする2つの命題を主張する。

Ⅰ．1つの商品の交換価値を表現するには、交換の対象となる各種商品に応じて、さ

4）一般均衡理論の立場に立つ貨幣・金融理論については、たとえば、永谷[24]・[25]、あるいは、ニーハンス[28]などがある。なお、「貨幣理論と価値理論との総合」を唱えるいわゆる「パティンキン論争」については、ジョンソン[12]第Ⅶ章参照。

まざまな形式が成立しうるが、これらすべての形式をつうじて表現される共通の要素がある。

II．交換価値は、この共通に存在する「実質」[5] のひとつの表現形式、あるいは、その「現象形態」にすぎない。

これらの命題に基づいて、交換価値を表現する、さきの一連の等式では、それぞれの商品の物理的な属性は異なるので、そのような属性とは別に、質的にみて同一な、なんらかの共通の要素があるはずであると、かれは、問題提起する。つづけて、商品の物理的な属性を反映する使用価値は、それぞれ異なった用途に利用される質的相違が問題にされるため、交換価値の大小を特徴づける、質的に同一で、ただ量的にだけ比較計量される差異をもたらすような要因のリストからは除外してもよいと断定する。そうすると、このような使用価値の捨象という「ふるい」にかけたあとでも、なお商品に残っている共通の属性は、唯一、それらが、ともに、労働生産物であり、しかも、使用価値の捨象と一蓮托生で、有用性をもたらす具体的有用労働も消失しているので、けっきょく抽象的人間労働の産物であるという性質だけが最後に残ると結論づける。こうして、「価値を形成する実体」は、この抽象的人間労働の量であり、その量は、この商品を生産するために通常利用される生産条件のもとで、社会的にみて平均的なレベルの熟練や強度に換算して、必要とされる労働時間で評価されることになる。

これまでみてきたように、価値形態論の議論を展開しようとする端緒の段階で、マルクスは、すでに、労働量という価値の実体規定を、いわば勇み足的に、導入してしまっている。このことは、交換行為そのものを考察の対象としたことや、この段階ですでに労働生産物だけに対象を限定したことと三位一体になって、次節で述べるように、価値形態論にあらわれる「等式」の両辺の役割の逆転という暴挙を容認するバックボーンにもなった。ともあれ、「社会的に必要な労働時間」が確立する条件が整備され、しかも、超過利潤の獲得をめぐる資本間の競争をつうじてそれが強制的に適用されるということは、生産活動と切り離された商品交換行為自体はもちろん、たんなる商品生産という条件だけからも保証されるわけではない。いわゆる「労働力の商品化」を契機として、資本がなんでも生産できる環境が整って、はじめて、利潤獲得競争を媒介にした利潤率均等化プロセスのなかで、各種生産部門への労働力の配分が調整され、それと同時に、「社会的に必要な労働時間」も確定されるメカニズムが備わってくるのである。このような資本主義社会の再生産プロセスの分析や、競争をつうじたシステムの運行の全体像の把握が必要なことがらについては、もはや、議論の端緒に自明な前提として認めることが不適切であることは、明白であろう。事実、『資本論』でも、これらのテーマは、第2巻、あるいは、第3巻になるまで議論を控えられている。このように、価値形態論を展開する前の段階で、価値の実体規定を密輸するような議論は、論理的にみて、不適当であろう[6]。

また、商品から使用価値を捨象したあとにのこるのが労働生産物という属性だけであるという議論は、いわゆるマルクスの「蒸留法」として知られているが、この離れ業には、

5）ここでいう「実質」とは、これから本文でみてゆくように、抽象的人間労働、いわば宇野のいう価値の「実体」に相当する。

当然、その限定性の論拠につけ込む余地が生じ、ベーム＝バヴェルクを陣頭に、つぎのような批判が浴びせかけられた。使用価値を捨象したあとにのこるのが、なぜ、労働生産物という属性だけに限定できるのか？　ほかにも、共通な属性がのこっていないのか？　有り体にいえば、「効用」という共通の性質が認められるはずである！このような主観価値説側からの批判にたいして、ヒルファディングが提出した回答・反批判も、けっきょくは、価値の実体規定に依存する論拠であったために、説得力に欠けるようにおもわれる[7]。

3.『資本論』におけるマルクスの価値形態論

『資本論』では、マルクスは、価値形態論の議論にさきだって、商品を規定する2つの要因として、人々に有用性をもたらす使用価値と、ほかの商品との交換比率としてあらわれる交換価値とをあげている。そして、ただちに、商品をつくりだす労働の議論へとすすみ、これら2要因に対応して、労働にも、この商品に有用性をもたらす具体的有用労働と、その交換価値を形成する抽象的人間労働という、2つの側面があると述べている。

> 「すべての労働は、一面では、生理学的意味での人間の労働の支出であって、この同等な人間労働または抽象的人間労働という属性においてそれは商品価値を形成するのである。すべての労働は、他面では、特殊な、目的を規定された形態での人間の労働の支出であって、この具体的有用労働という属性においてそれは使用価値を生産するのである。」[8]

この議論とあわせて、前節で紹介した、マルクスの「蒸留法」と「使用価値の捨象」とが展開され、この段階で、すでに、商品価値を究極的に規定する要因は、抽象的人間労働であると断定される。そして、この断定が、じつは、のちに、価値形態論の「等号」の逆転を容認する伏線となるのである。すなわち、「等号」があらわす2つの商品の等値の背景には、どちらも、抽象的人間労働として等しい量が投下されているという、暗黙の想定がある。そこで、以下では、この想定が、『資本論』のなかで価値形態論の論理をいかに矛盾と混乱に導いたかをみてゆこう。

価値形態論では、はじめに、いちばん単純ではあるが、そのなかには価値形態のエッセンスが凝縮されているケースとして、2つの商品のあいだの価値表現をめぐる関係である、

6）日高[7]によれば、労働力の商品化を抜きにした、いわゆる「単純商品生産社会」は、歴史的にみても部分的な存在にすぎなかったし、また、そこには労働量を基準として交換されるメカニズムは備わっていない。日高[7]17-18ページ。また、伊藤[11]第1章も参照。なお、森嶋[21]の「価値＝単純商品生産社会の価格」説については、Nagata[22]参照。

7）ベーム＝バヴェルクおよびヒルファディング[2]参照。また、大内・桜井・山口[30]第Ｉ章も参照。なお、このようなベーム＝バヴェルクの問題提起は、日本では、小泉信三や高田保馬らによって継承されて、山川均、河上肇や櫛田民蔵など、マルクス擁護者側を交えて、いわゆる「価値論争」が展開された。詳細については、向坂編[34]第3編、あるいは、川口[15]参照。

8）マルクス[19]訳書91ページ。

「簡単な価値形態」が、

x量の商品A＝y量の商品B

たとえば、

20エレのリンネル＝1着の上着

として紹介され、それぞれ、

x量の商品Aはy量の商品Bに値する

あるいは、

20エレのリンネルは1着の上着に値する

ということを意味するものとして定義される。そして、この関係のなかでこれらの商品が演ずる役割の相違点について、つぎのような、ただし書きがつけ加えられている。

「ここでは二つの異種の商品AとB、われわれの例ではリンネルと上着は、明らかに二つの違った役割を演じている。リンネルは自分の価値を上着で表わしており、上着はこの価値表現の材料として役立っている。第一の商品は能動的な、第二の商品は受動的な役割を演じている。第一の商品の価値は相対的価値として表わされる。言いかえれば、その商品は相対的価値形態にある。第二の商品は等価物として機能している。言いかえれば、その商品は等価形態にある。」[9]

「リンネルの価値は、ただ相対的にしか、すなわち別の商品でしか表現されえないのである。それゆえ、リンネルの相対的価値形態は、なにか別の一商品がリンネルにたいして等価形態にあるということを前提しているのである。他方、等価物の役割を演ずるこの商品は、同時に相対的価値形態にあることはできない。それは自分の価値を表わしているのではない。それは、ただ別の商品の価値表現に材料を提供しているだけである。」[10]

すなわち、左辺にあらわれる商品リンネルは、その価値を単独では表現できないために、他の商品のかたちを借りて価値表現をおこなわざるをえない。このように、能動的に価値を表現しようと働きかけるがわの商品を、マルクスは、相対的価値形態にある商品とよんでいる。これにたいして、そのさい、価値表現の材料として、リンネルがわから、一方的に採用された商品が、このケースでは、上着であり、この左辺に位置する受動的な役割を演じるにすぎない商品は、等価形態にあるとよばれる。このように、マルクス本来の定義では、「等式」の両辺にあらわれる商品は、価値を積極的に表明する左辺と、そのための材料として受動的に採用されたにすぎない右辺とは、あきらかに、異なる役割を演じることが強調されている。

ところが、「等式」の意味する常識的な先入観に幻惑されたのか、マルクスは、その直後に、

「20エレのリンネル＝1着の上着または、20エレのリンネルは1着の上着に値するという表現は、1着の上着＝20エレのリンネルまたは、1着の上着は20エレのリンネルに値

9）マルクス[19]訳書94-95ページ。

10）マルクス[19]訳書95ページ。

11）マルクス[19]訳書95-96ページ。

するという逆関係を含んでいる。」[11)]

といって、両辺にあらわれる商品の役割にかんする独創的な区別を、あやうく、だいなしにする危うさもあるが、つづいて、

「しかし、そうではあっても、上着の価値を相対的に表現するためには、この等式を逆にしなければならない。そして、そうするやいなや、上着に代わってリンネルが等価物になる。だから、同じ商品が同じ価値表現で同時に両方の形態で現われることはできないのである。この両形態はむしろ対極的に排除しあうのである。」[12)]

というぐあいに、やはり、この「簡単な価値形態」では、相対的価値形態と等価形態との峻別は、維持されていたといえよう。

つづいて、マルクスは、さきの「簡単な価値形態」では、リンネルの価値をあらわす材料として、たまたま上着が採用されたと想定したが、リンネルにとって、等価物となりうる候補は、上着にかぎらず、さまざまなヴァリエーションがありうることに注目する。

「個別的な価値形態はおのずからもっと完全な形態に移行する。個別的な価値形態によっては、一商品Aの価値はただ一つの別種の商品で表現されるだけである。しかし、この第二の商品がどんな種類のものであるかは、まったくどうでもよいのである。つまり、商品Aが他のどんな商品種類にたいして価値関係にはいるかにしたがって、同じ一つの商品のいろいろな単純な価値表現が生ずるのである。…商品Aの個別的な価値表現は、商品Aのいろいろな単純な価値表現のいくらでも引き延ばせる列に転化するのである。」[13)]

そうすると、この「拡大された価値形態」では、おなじリンネルの価値を表現する式ではあるが、そのための材料として採用されるさまざまな等価物ごとに、いくつもの「等式」が並列される。すなわち、

z量の商品A＝u量の商品B
または　　＝v量の商品C
または　　＝w量の商品D
または　　＝x量の商品E
または　　＝etc.

たとえば、

20エレのリンネル＝1着の上着
または　　＝10ポンドの茶
または　　＝40ポンドのコーヒー
または　　＝1クォーターの小麦
または　　＝2オンスの金
または　　＝1/2トンの鉄
または　　＝その他

である。

---

12)　マルクス[19]訳書96ページ。

13)　マルクス[19]訳書118ページ。

ところが、この「拡大された価値形態」でも、やはり、価値表現が完成の域に達することはない。マルクスによると、

「第一に、商品の相対的価値表現は未完成である。というのは、その表示の列は完結することがないからである。一つの価値等式が他の等式につながってくる連鎖は、新たな価値表現の材料を与える新たな商品が現れるごとに、相変わらずいくらでも引き伸ばされるものである。第二に、この連鎖はばらばらな雑多な価値表現の多彩な寄せ木細工をなしている。最後に、…この展開された価値表現で表現されるならば、どの商品の相対的価値形態も、他のどの商品の相対的価値形態とも違った無限の価値表現列である。」[14)]

すなわち、「拡大された価値形態」では、リンネルの価値表現にとって、さまざまな等価物を材料として表現できるというメリットの裏面には、等価物となりうるあらたな商品の出現が、完結することなき価値形態の列の延長をもたらすにすぎないという難点をともなう。したがって、リンネルは、さまざまな等価物のかたちで、その価値表現をえんえんとつづけなければならないが、このような事情は、他の商品にとっても回避できず、それぞれの商品は、まるでバベルの塔につどう人々のように、各自が採用したさまざまな等価物のことばで、ばらばらに、はてしない価値表現をくりかえすことになる。その結果、統一的な価値表現を欠いた、この形態は、各種等価物の混沌の世界におちいる。すなわち、

「展開された相対的価値形態の欠陥は、それに対応する等価形態に反映する。ここでは…それぞれが互いに排除しあう制限された等価形態があるだけである。」[15)]

そこで、このような「拡大された価値形態」の難点を解決できるような、さらにうえの段階の価値形態が求められることになるが、マルクスの解決は、安易に「等式の逆転」にうったえるものであった。これでは、産湯といっしょに赤子を捨ててしまうようなもので、いったん「等式の逆転」をみとめてしまうと、せっかく、価値形態の独創的な視座として、価値を表現する積極的な相対的価値形態と、そのための材料として受動的に採用されたにすぎない等価形態との峻別を唱えたにもかかわらず、はからずも、両者の役割を、実質上、おなじものに帰してしまうことになるのである。詳細については、次節で、「関係」として価値形態論を再構成するさいに、ふたたびふれることにする。ともあれ、マルクスにしたがえば、

「展開された相対的価値形態は、単純な相対的価値表現すなわち第一の形態の諸等式の総計から成っているにすぎない。たとえば、

20エレのリンネル＝1着の上着

20エレのリンネル＝10ポンドの茶

などの総計からである。

---

14) マルクス[19]訳書121ページ。

15) マルクス[19]訳書121ページ。なお、訳文では、「展開された価値形態」という表現になっているが、等価物のヴァリエーションの拡大という意味を考慮して、本稿では、宇野にならって、「拡大された価値形態」という用語を採用する。なお、「簡単な価値形態」という用語も、訳文では、「単純な価値形態」という表現になっている。

しかし、これらの等式は、それぞれ、逆にすればまた次のような同じ意味の等式をも含んでいる。

すなわち

1着の上着＝20エレのリンネル

10ポンドの茶＝20エレのリンネル

などを含んでいる。

じっさい、ある人が彼のリンネルを他の多くの商品と交換し、したがってまたリンネルの価値を一連の商品で表現するならば、必然的に他の多くの商品所持者もまた彼らの商品をリンネルと交換しなければならず、したがってまた彼らのいろいろな商品の価値を同じ第三の商品で、すなわちリンネルで表現しなければならない。―そこで、20エレのリンネル＝1着の上着　または＝10ポンドの茶　または＝etc.という列を逆にすれば、すなわち事実上すでにこの列に含まれている逆関係を言い表してみれば、次のような形態が与えられる。」[16)]

このように、マルクスは、「等式の逆転」という手品にたよって、「拡大された価値形態」から「一般的価値形態」への発展を主張する。そのさい、かれは、さきに注意した抽象的人間労働の等値の想定とあわせて、この引用文であきらかなように、じっさいの商品の交換過程を念頭に置いて、「等式の逆転」を正当化しようとこころみているようである。交換がおこなわれるときには、交渉の結果、相手との条件が一致するので、一方からみた相対的価値形態と等価形態との役割が、他方にとっては、まったく逆転してみえる。しかもこのとき、詐欺や無知を別にすれば、等労働にもとづく交換が条件になるはずだ、というような論理なのであろうか？　このような議論には、あきらかに、価値表現の方法としての価値形態論の論理と、じっさいの交換プロセスとしての交換過程論との論理の混濁がみられる。ともあれ、かりに、「拡大された価値形態」を逆転できるとすれば、

1着の上着	＝	20エレのリンネル
10ポンドの茶	＝	
40ポンドのコーヒー	＝	
1クォーターの小麦	＝	
2オンスの金	＝	
1/2トンの鉄	＝	
x量の商品A	＝	
等々の商品	＝	

という、「一般的価値形態」をえる。

この「一般的価値形態」にかんして、マルクスは、つぎのような注意をあたえている。

「いろいろな商品はそれぞれの価値をここでは（一）単純に表している。というのは、ただ一つの商品で表しているからであり、そして（二）統一的に表している、というのは、同じ商品で表しているからである。諸商品の価値形態は単純で共通であり、したがって一般的である。」[17)]

---

16)　マルクス[19]訳書122-123ページ。

すなわち、共通の等価物として採用された商品をのぞく、すべての商品は、この共通の商品だけのタームで、価値表現をおこない、この共通の商品以外には、けっして、等価形態におかれることはない。さらに、

「前のほうの二つの形態は、…どちらの場合にも、自分に一つの価値形態を与えることは、いわば個別商品の私事であって、個別商品は他の諸商品の助力なしにこれをなしとげるのである。他の諸商品は、その商品にたいして、等価物という単に受動的な役割を演ずる。これに反して、一般的価値形態は、ただ商品世界の共同の仕事としてのみ成立する。一つの商品が一般的価値形態を得るのは、同時に他のすべての商品が自分たちの価値を同じ等価物で表現するからにほかならない。」[18]

いいかえれば、「簡単な価値形態」と「拡大された価値形態」は、ともに、価値を表現しようとする相対的価値形態にある商品がわからの、一方的な価値の表明にすぎず、そのさいたまたま価値表現の材料として採用された等価物がわの商品には関係のない領域の問題をとりあつかっている、いわば「個別」の世界のはなしである。これにたいして、「商品世界」の共同事業として、合意のもとに、1つの商品がこの世界の共通の等価物として採用されるときに成立するのが「一般的価値形態」である。このように、マルクス自身、「拡大された価値形態」と「一般的価値形態」との立脚する世界が違うことを強調するからには、ますます、さきの「等式の逆転」に依拠する前者の形態から後者への移行の論理が受け入れ難くおもわれるのも当然であろう。

なお、マルクスは、つづいて、「一般的価値形態」から「貨幣形態」への移行を、つぎのように言及しているが、一般的等価物として金が採用され、この一般的等価物としての役割が貨幣の機能になるということで、基本的には、「一般的価値形態」とおなじなので、説明は省略する。

「その現物形態に等価形態が社会的に合生する特殊な商品種類は、貨幣商品になる。言いかえれば、貨幣として機能する。商品世界のなかで一般的等価物の役割を演ずるということが、その商品の独自な社会的機能となり、したがってまたその商品の社会的独占となる。このような特権的な地位を、…ある一定の商品が歴史的にかちとった。すなわち、金である。」[19]

20エレのリンネル	=	2オンスの金
1着の上着	=	
10ポンドの茶	=	
40ポンドのコーヒー	=	
1クォーターの小麦	=	
1/2トンの鉄	=	
x量の商品A	=	

17) マルクス[19]訳書123ページ。

18) マルクス[19]訳書125ページ。

4.「関係」としての価値形態

前節で検討したように、『資本論』におけるマルクスの価値形態論は、相対的価値形態と等価形態という、価値を表現するがわとその材料として採用されるがわとを峻別する画期的なこころみを提起したのではあるが、「価値等式」の背後に、価値の実体としての抽象的人間労働の等値を想定したり、取引者が相対するじっさいの交換過程を念頭に置いたりする傾向が、議論の正常な進行を妨げ、価値形態論の論理に矛盾と混乱を招いた。そして、この混乱は、「拡大された価値形態」から「一般的価値形態」への移行の論証に「等号の逆転」という禁じ手をつかうさいに最高潮に達する。そこで、以下では、宇野［38］のアイディアにもとづいて、マルクスの価値形態論のなかから、抽象的人間労働の等値と交換過程の様相とをふるい落とし、純粋な価値表現の観点から、論点を整理してみよう。

はじめに、マルクスもしばしば使用している「関係」というキーワードに注目しよう。じっさい、かれは、価値形態論の意義を「諸商品の価値関係に含まれている価値表現の発展をその最も単純な最も目だたない姿から光まばゆい貨幣形態に至るまで追跡すること」[20]と宣言している。

> 「われわれが、価値としては商品は人間労働の単なる凝固である、と言うならば、われわれの分析は商品を価値抽象に還元しはするが、しかし、商品にその現物形態とは違った価値形態を与えはしない。一商品の他の一商品にたいする価値関係のなかではそうではない。ここでは、その商品の価値性格が、他の一商品にたいするそれ自身の関係によって現われてくるのである。」[21]
>
> 「価値関係の媒介によって、商品Bの現物形態は商品Aの価値形態になる。言いかえれば、商品Bの身体は商品Aの価値鏡になる。商品Aが、価値体としての、人間労働の物質化としての商品Bに関係することによって、商品Aは使用価値Bを自分自身の価値表現の材料にする。商品Aの価値は、このように商品Bの使用価値で表現されて、相対的価値の形態をもつのである。」[22]

これらの引用から、価値の実体に関連する部分をふるい落とし、価値を表現する「関係」

---

19) マルクス[19]訳書130ページ。なお、金が一般的等価物になると、本来の使用価値とはべつに、価値表現の材料となること自体が金の「一般的使用価値」として認められるようになるので、相対的価値形態がわにある商品の物理的な測定単位・取引単位に応じて、それにみあう金の量を表示するという価値表現がおこなわれることを宇野[40]は指摘している。マルクスの「貨幣形態」の例は、せいぜい、￥100ショップぐらいしか該当しないというわけである。

20) マルクス[19]訳書94ページ。

21) マルクス[19]訳書98ページ。なお、マルクスは、価値の実体としての抽象的人間労働と価値形態との関係を、同一の化学式をもつ物質が、酪酸と蟻酸プロピルという異なったかたちで存在するという例で示しているが、宇野[39]は、そのような例示は不適切であるとする。同一の化学式をもつ分子のヴァリエーションについては、ウィルソン[43]では、グラフ理論の観点から採りあげられている。

22) マルクス[19]訳書102ページ。

だけに注目しよう。そのさい、宇野にしたがって[23]、売り手の立場から価値表現をみてゆこう。とくに、価値形態論に商品所有者を登場させたほうが論点が明確になるとして、『資本論』研究に斬新なエポックを切り開いた、宇野のアイディアは特筆に値する[24]。

はじめに、議論の前提として、「2項関係」と、そのなかでも特殊な意味をもつ「同値関係」とを導入する[25]。一般に、集合Aから、要素aとbとを取りだしてきたとき、aがbにたいしてなんらかの「関係」Rをもつとき、記号Rを利用して、

$$aRb$$

とあらわす。定義から、通常、aRbがかならずしもbRaを意味しないことは、あきらかであろう。そして、このような「関係」のうち、つぎの3つの性質、

$$aRa \qquad \text{(反射律)}$$

$$aRb \;\Rightarrow\; bRa \qquad \text{(対称律)}$$

$$aRb,\; bRc \;\Rightarrow\; aRc \qquad \text{(推移律)}$$

をみたす特殊な「関係」を「同値関係」とよぶ。マルクスの価値形態論の推論を2項関係の表現に翻訳すれば、これら3つの性質のどれもみたされないのではあるが[26]、とくに、「等号の逆転」問題と関連する性質が「対称律」である。このことを検証するまえに、「逆関係」という概念を導入しよう。すなわち、aがbにたいしてなんらかの「関係」Rをもつとき、bはaから「逆関係」R^{-1}をはたらきかけられたとして、記号

$$bR^{-1}a$$

であらわす。ようするに、これは、aRbとおなじ内容をbのがわから述べたにすぎない[27]。また、2つの関係RとPとが「等しい」とは、任意の要素a、bにたいして、

$$aRb \;\Leftrightarrow\; aPb$$

が成り立つことと定義される。このとき、もし、対称律が成り立てば、

$$aRb \;\Leftrightarrow\; bRa$$

いっぽう、逆関係の定義から、

$$aRb \;\Leftrightarrow\; bR^{-1}a$$

なので、けっきょく、

$$bRa \;\Leftrightarrow\; bR^{-1}a$$

であるから、相等の定義により、関係Rと逆関係R^{-1}とは完全に一致してしまう。

それでは、これらの道具を利用して、『資本論』で展開される価値形態論の議論を、価値の実体概念にふみいれることなく、数学的な「関係」概念に翻訳してみよう。はじめに、

---

23) 宇野[41]237ページ参照。なお、宇野の価値形態論は、売り手である商品所有者がわからの商品価値の値づけとして取りあつかわれている点で、買い手側の主観的な評価を意味する効用価値説とは、あきらかに、観点が異なる。

24) 宇野・向坂編[38]157-167ページ参照。なお、久留間[17]は、『資本論』に忠実に、抽象的人間労働の等値が価値形態の等式を根底から規定してはいるが、それが表現される形式だけを価値形態論で検討していると解釈し、このような解釈が「正当派」の「定説」になっているようである。遊部[1]、麓[5]、飯田[8]、杉本[36]なども参照。

25) 2項関係や同値関係については、たとえば、松坂[20]、石谷[10]などを参照。

「簡単な価値形態」では、リンネル所有者が、所有する商品リンネルの価値を、交換を希望する商品上着の使用価値のかたちをかりて、一方的に表明するという関係を、「20エレのリンネルは1着の上着に値する」という意思表明をあらわす記号、

$$_{20リ}R_{上1}$$

として表現しよう。このとき、もし、「等号の逆転」をみとめれば、対称律

$$_{20リ}R_{上1} \Rightarrow {}_{1上}R_{リ20}$$

が成立するので、上述の結果から、

$$_{1上}R_{リ20} \Leftrightarrow {}_{1上}R^{-1}{}_{リ20}$$

したがって、ほんらい、リンネル所有者がリンネル20エレの価値を表現するために、等価物として1着の上着を採用したという関係$_{20リ}R_{上1}$を、受動態の形式でいいかえた、1着の上着は等価物としてリンネル所有者から20エレのリンネルの価値を表現するために採用されたという同義反復にすぎない内容が逆関係$_{1上}R^{-1}{}_{リ20}$の意味であり、いずれにしても、価値を積極的に表明するリンネルと、そのさい受動的に価値表現の材料として採用されるにすぎない上着とのあいだには、相対的価値形態と等価形態との逆転は生じない。逆関係では、受動態の表現であるため、左辺がわにあらわれる商品は、形式上、主語の位置にあるようにみえるが、定義にさかのぼってその内容を検討すれば、依然として、相対的価値形態に立つリンネルと、等価物の役割を演じるにすぎない上着とのあいだに逆転は生じていない。ところが、いったん、等号の逆転が認められれば、この受動態の形式で表現された同義反復の関係$_{1上}R^{-1}{}_{リ20}$は、形式上の逆転にとどまらず、本質的な意味内容の変更をともなう関係である$_{1上}R_{リ20}$に一致する。後者は、上着所有者が1着の上着の価値を表現するために等価物としてリンネル20エレを採用したという内容をあらわすもので、あきらかに、相対的価値形態がわに立つ商品と等価形態を演じる商品とのあいだに立場の本質的な逆転が生じている。これでは、価値形態論の検討のさい、導入された、価値を積極的に表現する相対的価値形態と、その表現のため採用される受動的な等価形態とのあいだの峻別が無効になり、せっかくのマルクスの斬新的なアイディアも台無しになってしまう。

---

26) 反射律が成り立たないことは、注10) の引用文から、あきらかであろう。ただし、数学的な取りあつかいを容易にするために、便宜上、「自分自身が所有する商品と交換可能」と定義するばあいがある。また、一般に、リンネル所有者が上着との交換を希望し、同時に、上着所有者が茶との交換を希望したとしても、かならずしも、リンネル所有者が茶との交換を希望するとはかぎらないし、たとえそうであったとしても、交換条件が一致するとはかぎらないので、推移律も成立しない。なお、クラウゼ[16]は、価値形態論を交換過程論の立場から考察しているために、価値形態論の問題を「推移性問題」に矮小化している。

27) 数学的な定義からいえば、これは、逆対応に相当する。同様に、「関係」の「相等」の定義は、対応のそれに準じる。

5. おわりに

本稿では、『資本論』におけるマルクスの価値形態論の論理をみてきたが、「簡単な価値形態」の考察でみられる相対的価値形態と等価形態とを峻別するという慧眼にもかかわらず、「等号」の背後に抽象的人間労働の等値や交換過程論の想定をのこしたため、かれは、その論理を一貫させることはできず、「等号の逆転」という論理の破綻をもたらしたことを、数学的な「関係」の用語で議論した。そのさい、宇野にならって、価値形態論を検討する段階では、抽象的人間労働や交換過程論に関係する問題ついては差し控え、純粋な価値の表現問題として価値形態論を再構成することを意識した。価値形態論で「等号」を記号として採用するのはミスリーディングだということは、従来、宇野をはじめさまざまな人々によって指摘され、それに代わる記号として、日高[7]や山口[44]は矢印→を使用し、また、大内[29]では⇒という記号が採用されたりしている。前者の記号は、相対的価値形態に立つ商品がわから等価物への一方的な表現を意味し、さらに、後者では、価値が等しいと主張されるという意味を付加して、等号と矢印とを合成した記号と提唱されているようである。ところが、一般に、後者の記号は、推論のさい、十分条件と必要条件とのあいだの論理的に成り立つ関係をあらわす記号を意味するので、混乱を招きかねない。そこで、本稿では、一般的な「関係」をあらわす記号Rを使用したのであるが、日高や山口が採用した記号である矢印→も、じつは、グラフ理論では、一方通行的な関係をあらわす「有向グラフ」の記号として使用されていることは、価値形態論の一方通行的な関係とシンクロナイズして興味深い。価値形態論をグラフ理論の観点から、とくに、「拡大された価値形態」から「一般的価値形態」への移行問題をめぐって、再構成する課題は、別稿にゆずる。

参考文献

[1] 遊部久蔵編著『『資本論』研究史』（覆刻版）ミネルヴァ書房, 1971年。

[2] Böhm-Bawerk, E., *Karl Marx and the Close of His System*; and Hilferding, R., *Böhm-Bawerk's Criticism of Marx,* 1949, Augustus M. Kelley;（玉野井芳郎・石垣博美訳『論争・マルクス経済学』法政大学出版局, 1969年）。

[3] Casanova, G., *L'argèrbre de Bool,* Presses Universitaires de France(Que sais-je ?), 1967;（村田全・小室博明訳『ブール代数』白水社（文庫クセジュ）, 1968年）。

[4] 深見哲造『代数系とグラフ理論』培風館, 1983年。

[5] 麓健一『貨幣論』有斐閣, 1966年。

[6] Grossman, I. and W. Magnus, *Groups and Their Graphs*, Random House, 1964;（浅野敬三訳『群とグラフ』河出書房, 1970年）。

[7] 日高普『経済原論』有斐閣, 1983年。

[8] 飯田裕康『貨幣・信用論』同文館, 1976年。

[9] 伊理正夫・韓太舜『線形代数—行列とその標準形—』教育出版, 1977年。

[10] 石谷茂『現代数学入門序説』現代数学社, 1975年。

[11] 伊藤誠『価値と資本の理論』岩波書店, 1981年。

[12] Johnson,H.G., *Money, Trade and Economic Growth*, George Allen and Unwin, 1962;（村上敦訳『貨幣・貿易・経済成長』ダイヤモンド社1964年）。

[13] Kaufmann, A. et R. Faure, *Invitation a la recherche opérationnelle* (deuxième édition), Dunod, 1965;（阿部統・加藤茂夫訳『ORへの招待』好学社, 1972年）。

[14] Kaufumann, A., *Méthodes et modèles de la recherche opérationalle* (tome 2), Dunod, 1963;（国沢清典監訳『グラフの理論』東洋経済新報社, 1976年）。

[15] 川口武彦『価値論争史論』法律文化社, 1964年。

[16] Krause, U., *Geld und abstrakte Arbeit: Über die analytischen Grundlagen der Politischen Ökonomie,* Campus Verlag, 1979;（高須賀義博監訳『貨幣と抽象労働―政治経済学の分析的基礎―』三和書房, 1985年）。

[17] 久留間鮫三『価値形態と交換過程論』岩波書店, 1957年。

[18] マルクス『資本論初版鈔』（長谷部文雄訳）岩波書店, 1929年。

[19] Marx, K., *Das Kapital* (Erster Band), Dietz Verlag, 1962;（岡崎次郎訳『資本論（1）』（国民文庫）大月書店, 1972年）。

[20] 松坂和夫『集合・位相入門』岩波書店, 1968年。

[21] Morishima, M., *Marx's Economics: A Dual Theory of Value and Growth*, Camridge U.P., 1973;（高須賀義博訳『マルクスの経済学―価値と成長の二重の理論―』東洋経済新報社, 1974年）。

[22] Nagata, S., Role of Demand in Leontief-Sraffa System : Focusing Attention on the Duality between Quantity System and Value System, 九州大学『経済論究』第64号, 1986年。

[23] 永田聖二「「生産的」な流通行列―流通過程における利潤―」長崎大学教育学部『社会科学論叢』第54号, 1997年。

[24] 永谷敬三『貨幣経済の理論』創文社, 1977年。

[25] 永谷敬三『金融論』マグロウヒル好学社, 1982年。

[26] 中野正『価値形態論』（『中野正著作集』第1巻）日本評論社, 1987年。

[27] 根岸隆『ワルラス経済学入門―「純粋経済学要論」を読む―』岩波書店, 1985年。

[28] Niehans, J., *The Theory of Money*, 1978;（石川経夫監訳『貨幣の理論』東京大学出版会, 1982年）。

[29] 大内力『経済原論 上（大内力経済学大系第2巻）』東京大学出版会, 1981年。

[30] 大内秀明・桜井毅・山口重克編『資本論研究入門』東京大学出版会, 1976年。

[31] Ore, O., *Graphs and Their Uses*, Random House, 1963;（野口広訳『グラフ理論』河出書房, 1970年）。

[32] Patinkin, D., *Money, Interest, and Prices : An Integration of Monetary and Value Theory* (second ed.), Harper & Row, 1965;（貞木展生訳『貨幣・利子および価格―貨幣理論と価値理論の統合―』頸草書房1971年）。

[33] Robinson, J., *Economic Heresies*, Basic Books, 1971;（宇沢弘文訳『異端の経済学』日本経済新聞社, 1973年）。

[34] 向坂逸郎編『マルクスの批判と反批判』（マルクス・エンゲルス選集第16巻）新潮社,1958年。

[35] 向坂逸郎『資本論入門』（岩波新書）岩波書店, 1967年。

[36] 杉本俊朗編『マルクス経済学研究入門』有斐閣, 1965年。

[37] 田澤新成・白倉暉弘・田村三郎『やさしいグラフ論』現代数学社会, 1988年。

[38] 宇野弘蔵・向坂逸郎編『資本論研究』至誠堂, 1958年。

[39] 宇野弘蔵『価値論の問題点』法政大学出版局, 1963年。

[40] 宇野弘蔵『経済原論』(岩波全書版)岩波書店, 1964年。

[41] 宇野弘蔵編『資本論研究Ⅰ』筑摩書房, 1967年。

[42] 宇野弘蔵『経済学の効用』東京大学出版会, 1972年。

[43] Wilson, R. J., *Introduction to Graph Theory* (4th ed.), Pearson Education Limited, 1996; (西関隆夫・西関裕子訳『グラフ理論入門』近代科学社, 2001年)。

[44] 山口重克『経済原論講義』東京大学出版会, 1985年。

[45] 山口重克『価値論・方法論の諸問題』御茶の水書房, 1996年。